

貴重な資源を活かし、地元住民の力で活性化を推し進める町「奈良きたまち」(奈良市)

「奈良きたまち」とは、ならまち（奈良市）の中で近鉄奈良駅より北側に位置する場所を指し、南北に通る旧京街道（国道 369 号線）と東西に通る一条通りを中心とした地域からなる。

古くから、京都から奈良へ入る玄関口であったため旅籠や商店が数多く建ち並んでおり、奈良の中心拠点として大いに栄えた町であった。また、エリア内には国宝のてがいもん転害門をはじめとする数々の歴史的建造物や古いまちなみなど、多くの名所旧跡が点在している。

「奈良きたまち」の特徴と課題

「奈良きたまち」は、近年少子高齢化の影響、商業施設の郊外化による地元商店の閉店など町の空洞化が生じ、活気が失われつつある。さらに、住居が老朽化し、住民の中からも現代風の建物への建て替え需要も起こってきた。

また、以前奈良市が調査・計画した「ならまち基本構想」には「奈良きたまち」が含まれていたにもかかわらず、「ならまち」の整備が先行して行われ、北側の「奈良きたまち」は整備が行われなかった。

「奈良きたまち」には貴重な観光資源が豊富にあるのに、それを紹介する場や機会が少なく、十分なPRができていない。そのためか、奈良（奈良公園など）と京都を結ぶ主要幹線が縦断しているにもかかわらず素通りしている観光客が多く、東大寺、ならまちなど市内の主要な観光地に比べ観光客が極端に少ない。



「奈良きたまち」の拠点、転害門

奈良街道まちづくり研究会

「このままでは、大切なもの、保存しなければいけないものがどんどん失われていく」という危

機感が地元で高まった。そういったなか、「地域を活性化し、住民が安心して暮らすことのできるまちづくり」を目指して、地域住民によるボランティア団体「奈良街道まちづくり研究会」が平成 10 年 8 月に誕生した。

発足当初は 5 名でスタートし、現在のメンバーは 15 名。酒屋、米屋、電気屋、印刷屋、デザイナー、ペンションオーナー、公務員等様々な職業の人間が集まって、月 1~2 回の勉強会開催やさまざまな行事・イベントに取り組んでいる。また、研究会では「喜び多い町」「再び来たい町」をキャッチフレーズとし、「喜び」「来たい」という言葉を使って、敢えて地元を「きたまち」と称している。

「奈良街道まちづくり研究会」の活動

以下に「奈良街道まちづくり研究会」が取り組む活動の一部を紹介する。

◆東大寺修二会の「竹送り」お迎え式

一般的に「お水取り」として知られている東大寺の修二会での行法のひとつに「お松明」がある。二月堂の舞台を駆けぬけるこの「お松明」で使われる真竹は、京都山城地方から人々の手によって運ばれていた。「竹送り」と呼ばれるこの行事は一時途絶えていたが、昭和 53 年に京田辺市の山城松明講の人々によって復活した。

「竹送り」は毎年 2 月 11 日に行われ、京田辺で掘り出された竹は、観音寺で道中の安全祈願を済ませたあと、「奈良きたまち」のエリアである奈良阪まで車に積んで運ばれる。そして、ここからは旧街道を人力で東大寺まで進む。同会では平成 12 年からこの一行を出迎え、心づくしの歓迎

と休憩のおもてなしを行っている。以前はあまり知られてなかった「竹送り」だが、今や毎年数百名の参加者があるほどの行事になっている。



多くの参加者で賑わう「竹送り」

◆幻燈会

毎年8月に多聞城跡(※)に建つ奈良市立若草中学校の正面階段を利用して、幻の多聞城を1夜だけ出現させる幻燈会を開催している。ろうそくの灯りが立体的に浮かび上がり、絢爛豪華だったとされる往時の多聞城が蘇る。当日は相和太鼓の友情出演もあり、光と音の幻想の世界が醸し出される。 ※多聞城については後述



1年に1度、幻の多聞城が出現

◆奈良女子大学との連携協力

「奈良きたまち」のエリア内にある奈良女子大学と景観、都市計画、商店の活性化等について意見交換や研究を行い、「奈良きたまち」の活性化に向けて取り組んでいる。

奈良女子大学の取り組み

奈良女子大学は「奈良きたまち」のエリアに位置しており、地域と共存共栄の関係にある。すなわち、大学も地域住民であるというコンセプトのもと、地域の活性化に積極的に関わっている。

同大学では、文部科学省が実施している現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP=Good Practice)としてまちづくりに取り組んでいる。

◆旧南都銀行手貝支店保存活用プロジェクト

国宝東大寺転害門の正面北側に、昭和15年に南都銀行手貝支店として建てられた町家がある。現在は奈良市の所有になっているこの建物は取り壊しの計画があった。しかしながら、旧南都銀行手貝支店は「奈良きたまち」のターミナルに位置しており、銀行という性格上、地域住民にとっても昔から慣れ親しんだ大事な思い出が詰まった場所である。

このプロジェクトは、奈良女子大学の学生・教員と「奈良街道まちづくり研究会」他2つの地域のまちづくりグループ、奈良市が協働で保存活用の方策を検討し、その道筋をつけたものである。



転害門に隣接する旧南都銀行手貝支店

地域住民と意見交換しながら、町家の保存・活用案を作成し、地域住民・行政担当者・地元建築家を交えた公開講評会を開いて、それらの案の披露を行った。

同時に3つのまちづくりグループ、地元自治会、住環境学専攻教員からなる協議会「旧南都銀行手貝支店活用協議会」を立ちあげ、測量調査の結果や活用案などを検討しながら具体案をとりまとめ、協議会名で奈良市長に活用方策の提案を行っている。

提案では「施設は、同支店が転害門に隣接していることから、観光客の集客機能を備えつつ、かつ地元住民が気軽に集えて、この施設を起爆剤としてまちづくりが発展する機能を持つもの」としており、「地域文化」、「観光情報」、「まちづくり活動」の3つの拠点としての役割をあげている。

◆大門市場活性化プロジェクト

大門市場は、昭和35年につくられた市場で転害門の向かいに立地するが、近年、利用者が減り、空きブースが増えてきた。このプロジェクトは、市場の正員、地域のまちづくりグループと、学生・教員が協働した大門市場の活性化プロジェクトである。

具体的には平成17年に市場の見学、出店者へのヒアリング、売り出しイベントの企画・参加、利用者へのアンケート調査等を通じて、今後の市場のあり方を検討した。



大門市場の外観

また、秋の3日間という期間限定ではあったが、大門市場の空きブース3つを活用して、カフェ「oomon cafe」を作った。企画・インテリア設計・材料購入・材料加工・施工から営業まで基本的にすべてを学生が行い、カフェのメニューも、市場で販売されている食材を使った。

注目の観光資源

◆子規の庭

日本を代表する歌人正岡子規は、明治28年、28歳の時に奈良を訪れた。投宿したのは当時奈良を代表する老舗旅館「對山樓^{たいざんろう}」。この宿で柿を食べながら東大寺の鐘を聞き、「秋暮るゝ 奈良の旅籠や 柿の味」などの多くの句を詠んだ記録が残されている。

近年、對山樓跡地に子規が奈良を訪れた当時の柿の木が残っていることが判明。樹齢100年以上になるこの柿の木を保存することで、奈良の地での子規の足跡を顕彰しようとする気運が高まった。そして、子規が眺めたであろう柿の古木の元に、彼が好んだ草花を配した小園「子規の庭」が平成18年10月に東大寺長老を発起人代表とする「奈良の子規プロジェクト」の手によって作られた。



句碑の向こうに東大寺大仏殿が見える

◆多聞城

多聞城は下克上の代表的人物といえる松永久秀が永禄3年（1560年）に大和国北方の佐保丘陵に築城したもの。壮大な城郭で、織田信長が安土城築城の参考にしたとも伝えられている。佐保丘陵を切り崩して築かれた多聞城は四層の天守を中心に、白壁の櫓を城の周囲にめぐらした壮大・華麗な城郭であった。近世のどの城郭にもみられる「多聞櫓」の名称は松永久秀が築いた多聞城に由来している。

現在、多聞城跡は若草中学校の敷地となっており、正門を入ったところに多聞城跡の石碑が建っ

ている。また、城跡碑の前からは奈良盆地の北端が一望でき、この場所がいかに交通の要衝の地であったかが実感できる。



今や城跡碑だけが残る多聞城

◆奈良まちかど博物館

「奈良きたまち」は東大寺の世話をする職人の町としても発展した。それは刀工である「包永^{かねなが}」、

「鍋屋^{なべや}」など職業柄を偲ばせる名前が町名に残っ

ていることからもわかる。

まちかど博物館は、伝統の職人芸や生業としての技、生活の中の潤いとなる趣味の手仕事やコレク

ションといったものを地域の大切な財産として公開し、交流の輪を広げてもらい、まちづくりに生かしていこうというものであり、奈良市が認定している。

この趣旨に賛同した住民が館長として、観光客や地元の訪れる人たちを迎えている。

平成 15 年 11 月 1 日に一般の小売店や工房、大

学記念館など 10 館で開館し、現在は 13 館となっている。

<http://narashikanko.jp/j/whatsnew/machikado/>

◆奈良少年刑務所



山下啓次郎氏設計による奈良少年刑務所は、美しい煉瓦づくりの正門と外堀が特徴的

「奈良きたまち」の活性化に向けて

「奈良きたまち」には、貴重な資源としての「知られていない奈良」がたくさん残っている。地元人が新たなまちづくりに立ち上がったことから、最近では地域住民の間にも「奈良きたまち」の重要性や価値についての認識が浸透してきた。

奈良街道まちづくり研究会の山口育彦氏は、「今後は観光PRも含め、行政主導ではなく、地元が率先して動いていくことを基本に活動していきたい」と語る。

そういったなか、東大寺修二会の「竹送り」は、閑散期である奈良の冬のイベントとして効果的である。観光客が自ら参加できる歴史的なイベントでもあり、今後、さらなる参加者の増加が期待されている。

また、旧南都銀行手貝支店を有効活用する構想も町の活性化に役立つものと考えられ、提案の早期実現が望まれる。観光客の増加、そして町の活性化に向け、今後も住民、行政、大学、金融機関等が一体となった活動が必要不可欠である。

(丸尾、井阪)

